

加登田恵子学長への「送別の辞」

横山 正博
YOKOYAMA Masahiro

1. 加登田先生との出会い

加登田先生と最初にお会いしたのは、1993年の第41回日本社会福祉学会会場の上智大学の教室でした。加登田先生の前任校の共栄学園短期大学で教鞭をとられていた故日本社会事業大学名誉教授五味百合子先生が、私の前々任校の校長先生をされておられたご縁で、教員の人探しの依頼をするために待ち合わせたことに由来します。当時まだ加登田先生は30代であったと推測していますが、凛とした佇まいで話しかけてくださり、広い人脈がおありにあることに感服した記憶があります。その時は、数年後、本学で一緒に勤務することになることなど、まったく予想もできないことでした。その後、加登田学長のもとで、私が副学長を務めるなど当時を振り返れば青天の霹靂ともいべきことです。

加登田先生が社会福祉学部長となられた時に、運命のいたずらと思っていますが、社会福祉学科長を拜命致しました。本学名誉教授であり元社会福祉学部長の山本圭介先生は、猪突猛進という言葉がよく似合うと方だと愛情をこめて評されておられましたが、私はものごとのよしあしを瞬時に捉え、誰もが予想しないことを実は綿密に、また5年後10年後の先を見込んだ瞬発的な行動力と思っています。その根底には、学生一人一人を慈しむその動かざる福祉教育の理念が存在することを付け加えておきます。

わたくし個人としての感想ではありますが、何よりも楽しかったのは、加登田先生が学部長のおり、これからの社会福祉学部をどういう方向に進めていけばよいか、毎晩遅くまで加登田先生の研究室で語り合ったことです。語りの中には、何時も学生がいました。一人一人の学生の名前を上げながら、「こんな感想を述べた学生がいるけど、どう思う」などと問われながら、的確に応えられなかったことは多くありましたが、その学生の将来や教員としてどのように向き合えばよいか数々の示唆をいただいております。いつも2時間3時間は過ぎていました。0時を超えていたこともありました。私は、そもそも管理職には不向きであるといまだに思っていますが、管理職としてのあり方を学んできた頃でもありました。しかし、加登田学長のもとでの副学長職は、我ながら合格点には達していないと思っております。

2. 大学への貢献

1) 社会福祉学部の実習教育を中心とした創設期の基盤作り

加登田先生は、本学部が開設された1994年4月、前任校共栄学園短期大学から赴任されました。当時私は本学に赴任する前でしたので、詳細な創設期のことはわからないのが正直なところですが、社会福祉士養成教育における屋台骨である実習教育の基盤を作られたことは、数々のエピソードの伝承からうかがい知ることができます。

前任校で介護福祉士養成の実習教育の実績がおありになられるとは言え、一から社会福祉士養成の実習教育の基本理念、学修目標や実習教育プログラムの作成、実習施設との調整をはじめ、学部の1期生の教育を大胆かつ綿密に担われたことと思います。中でも、現在の「実習ハンドブック」の前身である150頁もある「社会福祉実習の手引き」は、おそらくお一人で作成されたものと拝察しています。時代の流れや社会福祉士法の改正にともない、これまで手引きは幾度となく改正されてきましたが、学部開

設当初の実習教育の理念は変わらないと思います。

例えば、現在もなお継続されているソーシャルワーク演習Ⅰの「企画演習」です。地域の施設・団体や住民の方とともに、地域の実態や課題解決策と一緒に学びながら、ソーシャルワーカーとしてどのように向き合うのか、どのように関係を形成していくのか、社会資源をどのように開発していくのかといったソーシャルワーカーの基礎力を身に付けるための教育プログラムを取り入れられました。これは、現在盛んに言われているアクティブラーニングやPBLといわれる教育方法です。このことについては、「地域に根ざした福祉実習教育の試み～プログラム企画演習の展開から～」(単著)山口県立大学『社会福祉学部紀要』第6号(2000年)に自ら執筆しておられます。すでに、四半世紀も前から取り組んでこられたことは、全国の社会福祉士養成大学の模範となりました。今でこそ、各大学の標準装備となっているアクティブラーニングやPBLをいち早く取り入れられた功績は、社会福祉士養成教育の発展に大きく寄与されたと言っても過言ではないと思います。

2) 社会福祉学部の文部科学省競争的資金採択

2006年度には、加登田先生(当時、社会福祉学科長)自ら文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に申請をされ、『<重層的な学生支援教育>による福祉人材養成～学生の成長課題と専門教育課題の有機的結合による福祉の人間力獲得をめざして～』として採択に至りました。採択後は事業統括責任者として存分にリーダーシップを発揮されました。この事業展開は、全国からも脚光を浴びることとなり、審査委員長の絹川正吉元国際基督教大学学長先生がわざわざ視察にまで来られたことは異例のことと聞き及んでいます。

この事業展開のひとつ大きな成果は、本学部の授業の副読本となるブックレットの作成です。すべての教員が自身の専門分野について、現状や課題、あるいは最新理論の紹介や自らの理論構築の発表の場となりました。ブックレットは、学生にも配布し、授業でも積極的に活用することができ、教育と研究が一体と取り組みであったと言えます。

また、本学部の開設以来、丁寧に細やかに学生を支援してきた内容を「重層的な学生支援教育」と称し、本学部で取り組んできた当たり前のことを一つの形としてまとめていただいたことは、われわれ教員にとっても大いなる自信を与えてくださいました。この内容は、今もなお学部案内にも掲載されており、学部教員の一つの規範的統合の機会にもなっていると思います。

3) 全学事業としての文部科学省競争的資金採択

2012年度には、加登田先生を中心に文部科学省「知(地)の拠点整備事業(COC)」に申請され、『<知の融合>と<異世代交流>による地域活力の創生』として採択されました。採択後は言うまでもなく事業統括責任者として存分にリーダーシップを発揮されました。このことは、地方の一公立大学の価値を高め、本学の存在感を内外に示すことができたと思います。事業全体を細やかにかつ大胆にマネジメントされ数々の成果をあげられたことは、まだ記憶に新しいところです。この時は、地域共生センターの所長であったと思いますが、この業績は後に副学長、そして学長となられた礎であったと思います。

わたくしもこの事業において、一つの研究チームを任せていただき、過疎地域の地域包括ケアシステムに関する研究を推進していくことができたことは、とてもありがたく思っています。ブックレットの発刊、論文発表、加登田先生や大学院生とともに韓国の慶尚南道の過疎地域に地域包括ケアシステムの比較研究のための視察調査の機会をさせていただきました。

3. 学長としての4年間

2018年4月に、第14代学長として就任されました。学長候補者となることに対するいささかの逡巡がおりになったと拝察しておりますが、本学の未来を託する人物として私を含めた何人かの教員で候補者となることをお願いしました。学長としての4年間は、おそらく長くもあり短くもあったと思います。

就任された1年目から、本学の改革のため学長プロジェクトとしての将来構想検討チームを結成されました。副学長及び各学部長等の部局長、また事務職員を含めた総勢11名が召集されました。この検討は約1年を要しました。

最終報告の中で、学長自ら本学の将来展望として「長期的人材養成方針＝ライフ・イノベーション・リーダーの養成」を掲げられました。ライフ・イノベーション・リーダーとは、「生命や生活、人生のあり方を改革して、社会的に意義のある新しい価値を創造し、地域社会に大きな変革をもたらす牽引的人材」と定義されました。本学のホームページには、「地域に根ざし 未来を拓く 自分を創る」とも表現されています。「ライフ・イノベーション・リーダー」が備えるべき能力は、①やまぐち(地域)への愛着と志：地域マインドの醸成、②少子高齢社会への対応力：健康長寿社会と地域活性化を支える専門性、③Society5.0への対応力：IT基礎技術+実践力(PBL)及び国際化(グローバル化)への対応力：国際コミュニケーション力とされました。

折しも、県の総合計画である「やまぐち維新プラン」においても大学全体のカリキュラム改正を行うことが明記されたことから、ライフ・イノベーション・リーダーの養成に向けて、2021年度からのカリキュラム改正の断行が加登田学長から指示されました。しかし、2019年冬からの新型コロナウイルス対応のため、やむなく1年延期となり2022年度からの改正となりました。

実際の新カリキュラムの開始を見届けぬままのご退職は無念もあると思われませんが、ライフ・イノベーション・リーダーの養成教育は、一例ではありますが、全学共通の教育である「基盤教育」(2022年度から基礎・教養科目の再編)において、「生命・生活・人生を探究する科目群」「言語コミュニケーション科目群」「数理・データサイエンス科目群」「実践的統合教育科目群」として結実しました。

以上の改革は、学長プロジェクトの報告書では、第1段階の改革と位置付けられています。第2段階の改革としては、「2019年度県に設置された「山口県新たな時代のひとづくり会議」(学長が構成員)の検討結果をもって、組織改編を含む教育改革を実施する。」と報告書にまとめられ、第2段階の改革準備を行う期間としても位置付けられています。

しかしながら、急遽2019年10月、「山口県新たな時代のひとづくり会議」の検討から、特に国際文化学部の改編の要請が県からあり、第2段階の改革に急ぎ着手されました。特に国際文化学部の改革に乗り出さざるを得ない状況となりました。これについては、大学全体にはいささかの動揺があったと思われませんが、2024年度に新たな学部に変えるところまで、話を進めることができましたのも、加登田学長が強力なリーダーシップを発揮されたことによるものです。

学長任期の2年目からは、新型コロナウイルス対応、実施直前での政府の方針転換による大学入学共通テストの実施など予期せぬことが多くありました。学長の指示のもとに具体的な実装を検討・実行する立場にある副学長としては、迷い迷い、行きつ戻りつつの牛歩の対応しかできませんでしたが、常に確かな指導・助言を頂きながらの日々でした。このような予期せぬ出来事や外的要因があろうとも、常に大学運営の基本理念を持ち、ゆらがない姿勢は、私にとっては、安心感と確信、さらに規範を与えてくださいました。

4. おわりに

送別の辞としては、まだまだ書き尽くせないことの方が多くあります。改めて、加登田先生の研究業績等を拝見したところ、なみなみならぬ業績を積み上げてこられたことには脱帽しかありません。個人的なことではありますが、「ケアワークにおけるアセスメントに関する一考察～問題解決アプローチによる介護実習記録のフォーマットづくりから」(単著)山口女子大学『社会福祉学部紀要』(1995年)は、実は加登田先生との2番目の出会いです。この論文は介護福祉士養成のことが素材ですが、現在の社会福祉士養成の実習教育に通底する思想を読み取ることができます。この論文を拝読した時は、大いなる刺激を受けたことは今でも新鮮に記憶に残っています。今も私の授業の中でも引用しながら、私の実習教育の原点ともなるべき論文でもあります。私自身、この論文をきっかけに看護分野の著作や論文にも関心をさらに持つようになり、現在の大学院教育にも生かしています。

また、いつも気軽に話しかけてくださり、時に私の脳裡にはクエッションマークが無限に羅列されるほどの未来の話をしてくださり、また研究の後押しをしていただき、ここ数年は加登田学長と最も近い位置で仕事をさせていただいたことは、感謝しかありません。

本稿初稿時は、解決すべき学内の課題がまだまだあり、2022年3月をもってご退職という実感がないのが現実ですが、長年にわたり、本学に対する深い愛情をもって、多大な貢献をされましたことに敬意を表するとともに、深謝いたします。加登田先生が積み上げられてきたことを、発展的に継承しつつ、次世代に引き継いで参りたいと思います。余談とはなりますが、かねてより茶目っ気たっぷりに言われていた「退職後は山羊を飼う」ことが実現されることを楽しみにしております。僭越ではありますが、ますますのご健勝を祈念して、送別の辞とさせていただきます。